

## 「茨の冠を載せて」 -マタイによる福音書講解説教 108-

## マタイによる福音書

## 第27章 15節～31節

説教 岡村 恒牧師

主イエスが十字架刑に磔にされた当日、ローマ帝国の総督によって裁判が行われました。

裁判官、ポンテオ・ピラトは主イエスを尋問しました。その席で、ピラトは私たちを代表して主イエスに「あなたは何者なのか?」と問い続けました。人々が「十字架につけろ」と叫ぶ中、ピラトは主イエスを無罪放免にしようとしませんが、主イエスは沈黙し続けられました。

イザヤ書の御言葉は、この日の主イエスのお姿を次の様に描いています。「彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、/口を開かなかつた。/ほふり場にひかれて行く小羊のように、/また毛を切る者の前に黙っている羊のように、/口を開かなかつた」(イザヤ書 53章7節)。

沈黙する主イエスが《無罪》であることをピラトはよく知っていました。そこで、祭りの特赦として、強盗殺人容疑者バラバではなく、この無実の人イエスを解放しようと提案しました。しかしピラトは、群衆の声に反してまで主イエスを釈放することはできませんでした。ついに、水で手を洗い、主イエスを自分の人生から排除してしまいます。「この人の血について、わたしには責任がない。お前たちの問題だ。(24)」と責任を放棄します。

私たちは今朝も、世界中のキリスト者と共に《使徒信条》で、『ポンテオ・ピラトのもとに苦しみ受け、十字架につけられ…』と告白しました。ピラトというのは、実は、私たち自身のことだからです。ピラトは、自分自身の地位や責任、経験や判断に縛られ、こだわりました。主イエスに興味を抱き、もう既に関わりを持ち始めていながら、自由に決断することができませんでした。また、律法学者やパリサイ人たちも、自分の正義にこだわり続けました。

しかし、キリスト者は、徹底して神にこだわります。他のことなどどうでも良くなります。神が、私たちの救いのために徹底してこだわって下さったからです。欲望や知恵、知識からも自由にされて、神にだけこだわって生きるのです。

私たちは誰もが、本来、この世のものではなく、神の国に属する者です。ところが、この世の力、目に見えるものに捕らわれてしまいます。神が、ひとり子を十字架に架けてしまうなどというむごたらしい真実に耐えられなくて、自分の理解、期待の範囲の中で神を捉えようとしてしまうのです。ピラトはまさに、このような私

たちの代表です。聖書を読み、礼拝に出席し、主イエスについて知る時、このお方はいったいどなたなのかと、私たちはピラトのように問いかけます。しかし、真実に耐えることができなくていらだちます。自分の人生に、主イエスが深く介入してくることに耐えられないのです。何とかして、神のひとり子を、自分の人生から排除しようとしてしまいます。

この日、ユダヤ人は《過越の祭》を祝う準備をしていました。出エジプトの夜、犠牲の小羊の血が民の家の門柱と鴨居に塗られました。神の民は犠牲の血によって救われました。この日、過越の犠牲が殺され、血が流されるのに合わせるように、主イエスの十字架刑が執行されました。主イエスは、あの小羊のように身代わりとして血を流し、殺されていったのです。神の救いのみ業が思い出される祭りの中で、神のひとり子が神の小羊として殺されました。

またこの日、一人の極悪人バラバが救われました。代々のキリスト者は、このバラバにも自分の名前を入れて読んできました。私たちは誰もが、死んで滅びるはずだったのに、主イエスによって命を得て開放された存在だからです。

通常、王の頭に載せられる王冠は、権威と力を表し、栄光に輝きます。主イエスの頭には茨の冠が載せられました。固いトゲが突き刺さり、何時間にもわたって主イエスを苦しめ続けました。そのトゲの一つ一つが、私たちの罪そのものです。全知全能の神に等しいお方は、辱められ、傷つけられ、殺されていく間中、その場所に留まり続けて下さいました。十字架から下りることをせず、私たちの罪の全てをご自分の身に負うために。茨の冠をその頭に載せられ、神に裁かれ、捨て去られる者の絶望を、主イエスはただ一人で、全部受け止めて下さいました。

私たちは、ピラトと同じ場所に身を置きながら、ただ一点、ピラトになかったものを手にして、主イエスに出会っています。主イエスの霊、聖霊が私たちを助け導いて下さり、私たちに、主イエスの沈黙の意味を教え、絶大な赦しを信じる信仰をお与え下さいます。十字架に架けられた主イエスの血によって、私たちの罪の赦しを実現したことを聖霊が証しています。

この受難節に、私たちはただ主イエスにこだわり続けます。ここにだけ、私たちの救いがあるからです。

(記 岡村 恒)